

第3章 学校における取組み事例

1. 小学校の事例

ゆびもじはみみのきこえないひとにとってたいせつなんだね ～聴覚障がい理解～

学年等

1年生 特別活動など

ねらい

日常の基本的な手話を学んだり、手話といっしょに気持ちをこめて歌ったりするなどして、手話に親しむ。

聴覚障がいのある子どもの保護者の思いを聞くなどして、学年に在籍する聴覚障がいの仲間を理解する。

地域のボランティア活動をしている方と出会い、「福祉のこころ」を育てる。

【指導について】

学年には2人の難聴の児童が在籍しており、2人とも補聴器をつけているので、周りの児童も聞こえにくいということは理解している。コミュニケーションの手段は主に読話（相手の唇の動きを読み取る）と発声を組み入れた口話で、児童も教職員たちもゆっくりとした言葉で対話をしていた。また、この2人の児童は少しだが手話も使うことができる。そこで、聴覚障がい者にとって、話し言葉以外に手話や指文字で話すことも有効なコミュニケーション手段であることを伝えるため、本校の卒業生で聴覚障がいのある子どもをもつ保護者であり、地域で手話の指導をされている方に指導を依頼した。手話の指導とともに、聴覚障がいのある子どもの保護者の思いを直接聞くことにより、2人の聴覚障がいの児童への理解につながると考えた。

手話を身近なものとして感じることができるよう、口で歌うだけでなく、歌詞をよりどころにして、手や体で歌うことにより、歌詞のイメージをより広く、より深く伝えることができる。そして、心をこめて手話で表現することにより、人と人との温かい交流を育てることができる。指導においては、手話の習得を目的とするのではなく、メロディやリズムにのって、手や指あそびの感覚で楽しみながらやりたい。

また、この取組みの実施にあたっては、まずは教職員の聴覚障がいへの理解が重要であると考え、全教職員対象の校内研修において、指導していただく方に聴覚障がい者の取り巻く状況や家族の思いなどをお聞きした。

取組みの流れ

<全4時間>

第一次 聴覚障がいのある子どもの保護者による手話講座 3時間

あいさつや月日など 気持ちの表し方など 歌など

第二次 福祉委員会の方による手話コース 1時間

取組み例

第一次

3時間

聴覚障がいのある子どもの保護者による手話講座

日常生活の基本的な言葉

あいさつ 1月～12月 曜日
動物の名前 好き、嫌い など

気持ちの表し方

うれしい、悲しい、
こわい、楽しい など

日常的な基本的な言葉と歌

仕事の表し方 歌(さんぼ) など

- ・曲想を感じ取って、明るい声で歌おう！
- ・歌詞の内容を生かして、手話といっしょに気持ちを込めて歌い、手話に親しもう！



第二次

1 時間

福祉委員会の方による手話コーラス

< 曲名 >

つばさをください さんぼ あーおいし
海 ふじさん きらきらぼし など



< 児童の感想 >

「しゅわをおしえてもらって」

たもくてきしつでおばちゃんたちにしゅわでうたをおしえてもらったよ。きらきらぼしはかんたんだけど、ふじさんはむずかしかったよ。きょうせんせいにゆびもじをおしえてもらいました。じぶんのなまえができてたのしかったよ。

きらきらぼしやかたつむりはかんたんでした。ゆびもじは、みみがきこえないひとにとってはだいいじとおもいます。きょうはじめてゆびもじをしました。でも、はじめむずかしかったけど、だんだん慣れてきました。とくに、てもじがたのしかったよ。ゆびもじはみみのきこえないひとにはたいせつなんだねっておもったよ。

手話の取組み実施にあたって、校内研修にて聴覚障がいのある子どもをもつ保護者（手話を指導していただく方）の思いをお聞きし、児童への指導に生かした。

聴覚障がいのある子どもをもつ保護者の思い（校内研修より）

2歳の誕生日、近くの病院での検査の結果、お医者さんから「聞こえていません」と伝えられました。その時は何の感情もわからず、ただ「どうしたらいいのか...」と思うだけで帰宅しました。言葉の遅れは少し気になっていましたが、まさか自分の子どもの耳に障がいがあるなんて夢にも思っていませんでした。

細かい検査の結果、「感音性高度難聴」という診断でした。電車に乗っていても、電車の走る（ガタンゴトン）音が聞こえないという説明を受けました。そして、週2日A聾学校（現A聴覚支援学校）に通学を始めますが、毎回自然と涙があふれました。「補聴器をつけてもすぐには話せません。今から聞きだめ（言葉の基礎づくり）をして、一年後には必ずうれしいことがありますよ。それまで、いっぱい経験や体験、ことばの海を与えてあげてください。」という先生の言葉に励まされました。

また、「学校ではお母さんは泣かないで（先生がお母さんをいじめているとらえてしまって学校がいやな場所になってしまうから）」、「必ず連れて来て（後は任せてください）」、「兄弟姉妹関係をしっかり作ってください（将来大切な関係になるから）」という先生の言葉も心に残っています。

A聾学校の幼稚部に進み、話す、身振り・手振り、手話、キュードスピーチ（発音発語、読語の補助手段として、口形と手の動きで日本語の音を表す話し方）などいろいろな手段を使い、言葉の力を培っていきました。とにかくコミュニケーションを取り、言葉かけを増やしていきました。

これは、私が一週間に一回書いた日記です。

絵日記も成長に合わせてキュード文字（口形と色で五十音を表す文字）から簡単な文章へ変わっています。

5歳になると、地域の幼稚園にも週一回通園を始めました。

そして小学校入学。就学先はA聾学校の小学部が地域の小学校なのか悩みました。聾学校では元気なのですが、地域の幼稚園ではしょんぼりとした姿が多かったからです。

でも、「地域の人たちに娘の存在を知ってほしい」「近所に友だちをつくってほしい」という思いが強く、地域の小学校への就学を選びました。また、地域の幼稚園に行っている時に当時の校長先生から、「地域に帰っておいで」と声をかけてもらったり、小学校の先生が聾学校まで娘を見に来ていただいたり、『学校が受け入れてくれている』と思えたのも大きかったです。

地域の小学校に行くことになり、娘は近所に友だちがいっぱいでき、バスケットという夢中になれるものもできました。

私は自分が小さい頃からこの地域に生まれ、育って来ました。娘に聴覚の障がいがあるとわかってからこの地域から出ようかと考えたこともありました。

しかし、夫が「だからこそ、この地域で！」と言ってくれたのです。どこへでも連れて行っていろんなところで娘のことを話していました。娘が難聴であるということもです。娘には「こうやって人と接するんだ」というのを身をもって示してきました。その姿を見て、私も地域に行こう、みんなとつながっていこうと思えるようになりました。

今、私は地域の幼稚園や学校で手話を教えています。幼稚園では「手話のおばちゃん」と呼ばれています。友だちとなじめない子も手話を使うと仲間に入れたりしゃべれたりしています。手話を話せる子が増えたらいいなあと思っています。でも、手話ができないとだめかという、そうではなく、もっと大事なことがあります。例えば、話をしている時に「わかる？」と合図をしてくれたり、娘の方を見ながら話をしたりするだけで、娘は「自分のことを気にかけてくれる」



「仲間に入っている」と思うそうです。自分の居場所があるという安心感を感じることができるみたいです。そのことをみなさんにも知ってもらい、耳の聞こえにくい人に出会ったら、その人の方を向いて話をしてほしいなと思っています。

取組みを終えて

講師は、あいさつや気持ちの表し方など1年生にも十分理解できる内容を準備してくださり、児童らは講師の手話を必死でまね、覚えようと懸命であった。手話が自分にもできるという喜びと感動を3日間の手話講座で味わうことができたことは、大変貴重な体験であったと思う。

授業後、もっと手話を覚えたいという声も多く聞かれた。また、2人の難聴の児童とも習いたての手話を入れながら対話している光景も見られ、ほのぼのとした気持ちにさせられた。

また、講師は、聴覚に障がいのある子どもをもつ保護者でもあるので、手話の指導とともに、障がいのある児童の気持ちやその保護者の思いについても1年生にもわかりやすいように話していただき、学年に在籍する2人の難聴の児童への理解につながっていった。

今後は、低、中、高学年の発達段階にあわせて、聴覚障がいのある人の状況は個々様々であり、コミュニケーション手段としても手話だけでなく、筆談や読話など、聞こえを補う方法が様々あることを学ばせたい。このような指導の積み重ねを基に、児童たちに豊かな表現力と温かい心を培い、障がいのある人との心の交流を積極的に進めていきたいと考えている。

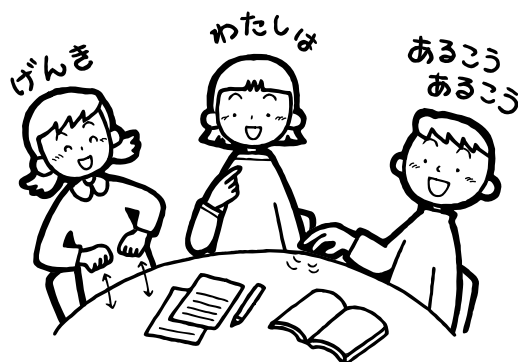
【ポイント】

学校の中で、難聴児童が他の児童とともに学び、ともに生活することが、障がいがある児童のみならず、周りの子どもたちにとっての福祉教育にもつながる可能性を示した実践であり、特に次の3点がポイントとしてあげられる。

担当教員だけでなく全教員が校内研修にて事前学習を行い、学校全体の取組みとして位置づけている。

教員と卒業生の保護者との協働参画の実践であり、卒業生の保護者は学校の特別支援教育を支援するボランティアであり、教育基本法の第13条に示されている「学校、家庭及び地域住民などの相互の連携協力」にあたる。

手話習得を目的とするのではなく、「手話」をコミュニケーションの方法ととらえ、楽しみながら手話を使って「聴覚障がい児の生活理解」を深め、人間関係の拡大も図っている。(本資料集11頁参照)



いっしょにいるとあんしん

～高齢者との交流～

学年等

2年生 生活「わたしとかぞく」
～おじいちゃん おばあちゃんと いっしょ～

ねらい

一人暮らしの高齢者を訪問し、昔の遊びを教わったり、昔話を聞かせてもらったりしながら昔から伝わっている知恵を知り、高齢者のやさしさやあたたかさにふれる。児童たちの合奏や、紙芝居を聞いてもらったり、手作りのおもちゃでいっしょに遊んだりして楽しい時間を過ごす。

高齢者と交流して智慧を学ぶことで、「福祉のこころ」を育てる。

【指導について】

民生委員さんたちは、80才以上の一人暮らしの高齢者のために、家に行き「元気にしてる？変わりない。」と、声をかけたり、月2回食事を届けたり、イキイキサロンを開き、楽しい時間をつくったりしておられる。また、「キッズ・Eyeぼらんていあ」といって、小学生が週1回、民生委員さんと一緒に一人暮らしの高齢者の家に行って学校であったことを話したり、歌を歌ったりしている。

これらの活動には、お年寄りの「孤独死」を出さないという強い思いがあり、クラスの中にこの「キッズ・Eyeぼらんていあ」に入って活動しているAさんがいるので、活動の話をしてもらった。すると「私も行きたい。ぼくも」という声が出たので、民生委員さんと相談し今回の活動につながった。

児童たちの生活を見ると、祖父母と同居している児童は少ないが、近くで暮らしていてよく行ったり来たりしている児童が3分の1以上いた。しかし、どこかに連れて行ってもらうことがあっても、「一緒に遊ぶ」ということはあまりないようだ。まして、曾祖父母ぐらいのお年寄りと一緒に過ごすことは、ほとんどない。また、学校では外遊びなど休み時間を待ちかねているが、家に帰るとゲームが中心で、遊びの幅が狭いように感じられる。そのような児童たちに、昔から伝わっている遊びは、遊びの幅を広げ、より豊かな生活を過ごすための貴重な体験となるであろう。

この活動をきっかけに、身近にいる多様な年齢の高齢者に直接ふれ合い、お互いの顔や名前を覚え、地域の人々とより交流を深めることを大切にしたい。そして、みんなでその遊びを楽しむ中で、身近な人々との接し方や、相手との関わりを大切にできる心情や態度を養い、「福祉のこころ」の醸成につなげたい。

取組みの流れ

<全5時間>

- 第一次 準備をしよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3時間
・グループ分け ・役割決め、出し物の相談 ・おみやげ作り、出し物練習
第二次 高齢者宅訪問、手紙を書こう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間
・高齢者宅訪問 ・手紙を書こう

展開例

第一次 3時間 準備をしよう

グループ分け

- 活動しやすいように、1グループを4～5人で編成する。
自分の住んでいる地区に入るようにする。
・自分の地区の高齢者と親しくなり、挨拶や言葉かけがしやすくなる。
・おじいさん、おばあさんが、誰の子どもか、誰の孫かを知ることができる。

役割を決める。出し物を考える。

グループ活動により、リーダーとしての責任や協調性、思いやりを育てる。
 みんなで協力しながら計画を立てる。
 視覚、聴覚など、体に障がいのある方がおられるので、それぞれの状況の方が楽しめるように工夫した出し物を考える。

- ・例えば、紙芝居や「きらきら星」を鍵盤ハーモニカとカスタネットで合奏する。
- ・座っていてもできるこま回しをする。

聞こえるように大きな声で読むね。



「ひまわり」(支援学級)さんで作ったこまをしよう。

おみやげを作る。練習する。

おじいさん、おばあさんが、あまり動かなくても楽しめるものを考える。
 あいさつや司会など、自分たちで会を進められるようにする。

第二次 2時間 高齢者宅訪問、手紙を書こう

高齢者宅訪問、手紙を書こう。

高齢者宅を訪問し、昔話を聞いたり、遊びを教えてもらったりする。
 児童が紙芝居や合奏をしたりして、楽しい時間を過ごす。
 親しみと礼儀をもって、話し方や接し方を考える。

- ・一方的なものでなく、双方向の交流になるようにする。
- ・負の面のみでの理解にならないよう、楽しい交流にする。

学 習 活 動	活 動 の ポ イ ン ト な ど
1 民生委員さんが学校に迎えにくる。輪になって待つ。 ・あいさつをする。「おはようございます。」 「お願いします。」	・民生委員さんにお世話になることを理解させておく。
2 自分の住んでいる地区に行く。 (4～5人で8地区に分かれる)	・車に気をつける。ふざけて迷惑をかけないようにする。
3 一人暮らしの高齢者宅を訪問 ・リーダーあいさつ 「こんにちは。僕たちは、 小学校の2年生です。」 ・鍵盤ハーモニカとカスタネットで合奏する。 「きらきら星の合奏をします。聞いてください。」 ・紙芝居をする。	・自己紹介をする。誰が来たのかをしっかりと知ってもらおう。 ・出し物は、視覚や聴覚に障がいのある方がいらっしゃるので、ゆっくり大きな声(音)で伝える。 ・昔話のように親しみのあるものをする。

- ・手のりごまで、お年寄りと遊ぶ。
- 「ぼくたちが、見本を見せます。見てください。」
- 「これは、おみやげに置いていきます。遊んでください。」

- ・おしゃべりタイム



とこの
孫か？

学校では今、何を
習ってんや。

このこまよう回る。
あんた上手やなあ。

4 帰校

- ・お礼の手紙を書く。

- ・こまは、支援学級の仲間に教えてもらった物を、人数分作って一緒に遊ぶ。
- ・こまは、おみやげに置いてくる。

- ・昔の学校の話や遊びを教えたらう。

あんたのおじいち
やんと同級生や！



83 才や。
ここらはきれいな
海やってんで。

また来てや。楽しか
ったわ。ありがとう。

- ・後日、民生委員さんに届ける。



大きな声で、
はきはきと発表しました。



おもしろい！
ようまわるわ！
うまい！うまい！
パチッ パチッ（拍手）



< 児童の感想 >

「おばあさん・おじいさんと出会って」

きょうは、おばあちゃんたちとこままわしをしました。BさんとCさんがものまねをしたよ。じこしょうかいをしました。昔の学校のことも教えてくれました。とても楽しかったです。

きょう、近くのおばあちゃんの家に行きました。おばあちゃんは目があまり見えないことを知ったので、紙しばいもピアノカもしっかり目の前ではっきりとしてあげました。

Dさんのおばあちゃんのところに行きました。紙しばいをしんげんに聞いてくれました。ピアノカをしました。えがおで、聞いてくれました。こまをまわしてあそびます。お元気でながいきてください。

Eさんのおばあちゃんのところに行きました。かさこじぞうの話をしんけんに聞いてくれました。合そうをしました。えがおで聞いてくれました。しりとりをしました。おもしろかった。家の中をたんけんしました。めいろみたいでした。おもしろかったと言ってくれました。うれしかった。「わらったのは、ひさしぶりや。」と、言っていました。楽しかった。

取組みを終えて

この取組みは、学年に在籍している児童Aさんの話を基にして、民生委員さんの力を借りてできたものである。

地域に住む高齢者との出会いを通して、児童は自分と違う立場の人を理解し、他者への思いやりの心が育っていったようだ。活動の後、「Aさんのように『キッズ』(キッズ・Eyeぼらんていあ)に入りたい。」と言う児童が増えた。一人でも多くの児童が「キッズ」に入って活動を続けてほしいと思う。また、児童たちは、自分のおじいさん、おばあさんだけでなく、いろんな年代の高齢者に、これからも優しく声をかけたり、接したりしていけるようになっていくであろう。教員からみてこの町は、本当に「人にやさしい町」である。

この取組みをきっかけにして、今後の障がい理解のための教育やボランティア活動につなげていくつもりである。児童たちには、「この町は、本当に『人にやさしい町』だ。」と気づかせ、このような町を作っていくのは自分たちなのだと理解させ、行動できる人に育てていきたいと考えている。

【ポイント】

この取組みは、民生委員や地元の高齢者が子どもたちの福祉教育の支援者となって活動し、また子どもたちも地元の高齢者の孤立化の防止や生きがいづくりに貢献している。まさに、子どもたちと高齢者の双方にとって意義のある福祉教育である。また、子どもたちが「キッズ・Eyeぼらんていあ」を通して、自分たちのできることを考え、行動化することも視野に入れており、「生きる力」を実践の場で育むことも期待できる。

核家族化・少子化で、子どもたちは日常的に高齢者と関わる機会が少なくなっており、高齢者が日頃感じている思いや生活を理解しにくく、高齢者を尊敬し思いやりの心をもつことは難しくなっている。

一方、「孤独死」といった社会的孤立や孤独感を感じている高齢者が増加しており、高齢者福祉の視点からも、このような異世代交流は非常に有効な取組みである。

このように、子どもたちと高齢者の双方向の交流を通して、お互いの優しいまなざしや自分たちが愛されていることを実感できる取組みを行うことは重要である。このような実践は、この取組みのように学校と社会福祉協議会との協働参画型で行われると一層効果的であろう。

みんなちがっていいんやなあ

～ 支援学級との交流及び共同学習～

学年等

3年生 特別活動など

～ 支援学級生 A さん（発達障がい）が安心して過ごせるクラスづくり～

ねらい

一人ひとりが安心して過ごすことができる学級をつくる。

児童どうしが、お互いに見合い、聴き合う関係をつくる。

違う考えをもっている、それを認め合い、つながりあう関係をつくる。

【指導について】

年間を通じて、児童がつながるためのワークなどの取組みを行い、多様な考えにふれ、自分とは違う考えを受け入れる集団にすることを意識している。また、周りの状況を判断することが難しく、感情のコントロールをすることが苦手である児童 A さんを中心に位置づけた取組みを進めた。このような A さんへの支援は、周りの児童たちへの支援にもつながるものだと考えている。

年間の取組み

() 『わたし出会い発見』(大阪府人権教育研究協議会編)より

<見合う・聴き合う>

- * 朝の会でのスピーチ
- * 帰りの会の気持ちのカード

<トラブルがあった時>

- * ロールプレイングでの話し合い
- * コミック会話(写真)

<クラスの雰囲気づくり>

- * ふわふわことば、ちくちくことば()

<協力のワーク>

- * 新聞紙ジグソー()
- * 絵合わせパズル(取組み例)

- * 大根ぬき(写真)
- * グループワークトレーニング

<多様性のワーク>

- * 動物ビンゴ、食べ物ビンゴ
- * どんな形になった？
- * 不安の穴(写真)
- * こんな友だちが大切(取組み例)



写真



写真

大根チームが手をつないで固まっているのを、人間チームが引っ張って大根を抜いていく。ケガをしないように加減をしながら抜いたり、手が離れないように作戦を立てたり協力しあう。



写真

困ったことやもめごとがあった時、3コマまんがに起こった事を書き、状況を整理する。書いて整理した後、対処法を考える。

「不安に思うことは一人ひとり違う」と多様性が実感できるワーク。「地震」「死」「戦争」「おばけ」「人前で話す」「一人ぼっち」等を、不安な順にランキングする。不安に思う心を穴の中へ落として終わるのだが、その過程で一人ひとりの思いを交流する。

取組み例

<取組み例> 「こんな友だちが大切」

- 【目標】 人それぞれの価値観のちがいに気づく。
- 【展開計画】 第一次 こんな友だちが大切（本時）
第二次 自分はどんな友だち？
- 【本時のねらい】 ・自分の思いや考えを友だちに伝えることができる。
・人それぞれの価値観のちがいに気づくことができる。
- 【本時の展開】

学 習 活 動	予想される児童の様子	指導のポイント
<p>アイスブレイク 「てとてとて」ゲームをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「てと」は手を上へ ・「とて」は手を下へ 	<ul style="list-style-type: none"> ・「むずかしい」 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板にルールを提示する。 ・たいこを使って、手を動かすタイミングをはっきりさせる。
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; display: inline-block;">「こんな友だちが大切」</div>		
<p>ダイヤモンドランキングの説明を聞く。</p> <p>ダイヤモンドランキングをつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの上に並べる。どうしてその順位に並べたのか理由を書く。 ・ワークシートに記入する。 グループの人の話を聞く。 ・一人ずつ発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の意味がわからなくて困る。 ・悩んでなかなか並べることができない。 ・どのように書いてよいか悩む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明を黒板に視覚的に提示する。 ・悩んで並べることができない場合は、ランキングするのが2位まででもよいことを伝える。 ・個別に援助する。 ・書いてあることを伝えればよいということを伝える。 ・声のものさしで、発表する時の声の大きさを確認する。 ・班の中で発表する順番を指定する。 ・<u>自分にとって、友だちに大切な要素は何かを考えることができたか。</u> ・<u>自分のランキングの理由を友だちに伝えることができたか。</u> ・<u>自分と友だちのランキングの違いに気がつくことができたか。</u>
<p>自分のダイヤモンドランキングを決定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・のりでワークシートにはる。 自分のランキングを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ランキングを変えようか悩む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの話を聞いて変更してもよいことを伝える。
<p>振り返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入する。 	

こんな友だちが大切

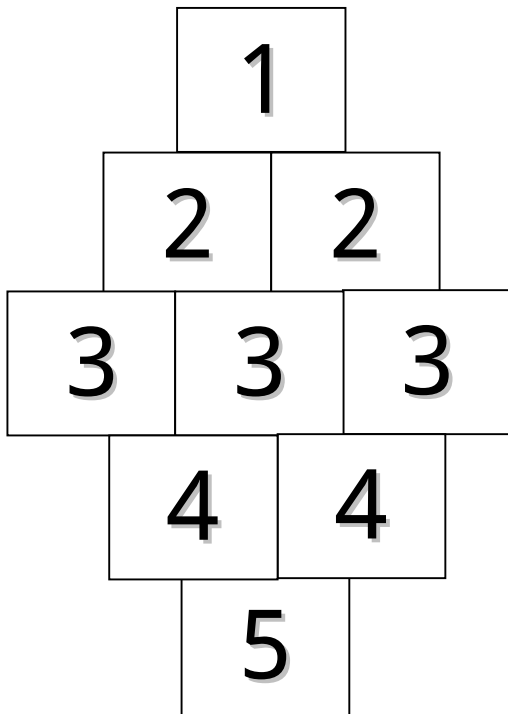
名前 ()

あなたにとって「大切な友だち」とは、どんな友だちですか。

話が楽しい友だち
いっしょに遊べる友だち
べん強を教えてくれる友だち
自分の気持ちをわかってくれる友だち
ふわふわことばを言ってくれる友だち

しっばいしてもゆるしてくれる友だち
一人でいたら声をかけてくれる友だち
こまったときにたすけてくれる友だち
話をきちんと聞いてくれる友だち

上のないようをダイヤモンドランキングしてみましょう。



< どうしてこのようにならべましたか >

< 思ったことを書きましょう >

<カード>

話が 楽しい	いっしょ に遊べる	べん強を 教えて くれる	自分の気持 ちをわかっ てくれる	ふわふわ言 葉を言って くれる
しっばいし てもゆるし てくれる	一人でいた ら声をかけ てくれる	こまった時 にたすけて くれる	話をきちん ときいて くれる	

<取組み例 > 絵合わせパズル 「協力して絵をあわせよう」

【目標】 課題解決のためには、お互いの協力が必要であることに気づく。

【本時の展開】

学 習 活 動	予想される児童の様子	指導のポイント
<p>アイスブレイク 「てとてとて」ゲームをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「てと」は手を上へ ・「とて」は手を下へ 	<ul style="list-style-type: none"> ・「だいぶができるようになってきたなあ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板にルールを提示する。 ・たいこを使って、手を動かすタイミングをはっきりさせる。
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; display: inline-block;">「協力して絵をあわせよう」</div>		
<p>パズルの作り方の説明を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉は使えない。 ・ジェスチャーも使えない。 ・使わないピースはかごに入れる。 ・必要なピースはかごから取る。 <p>グループ毎に封筒をもらう。 各グループで作業を開始する。</p> <p>作業を中断して意見を出し合う。</p> <p>作業を再開する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジェスチャーは使ってよいことにする。 <p>振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入する。 <p>振り返りを交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「どうやってできるの？」 ・「わからない」 ・パズルの組み合わせに苦労する。 ・言葉やジェスチャーで他の人に伝えようとしてしまう。 ・「友だちが気づいてくれない」 ・「周りを見ながら作っている」 ・「教えてあげたいけど教えてあげることができない」 ・はりきって友だちに教える。 ・「うまく行ってよかった」 ・「ほしいピースをもらえてよかった」 ・「教えてもらえてよかった」 	<ul style="list-style-type: none"> ・前で見本を示す。 ・黒板にルールを提示する。 ・ピースを組み立てるための、台紙を全員に用意する。 ・ルールを書いた紙を提示する。 困っている場合は落ち着くように言葉かけをする。 ・気持ちの確認をする。



言葉が使えないと
なかなかむずかしいなあ。



<「ふわふわことば」について>

言われるとうれしくなったり、元気が出たり、心があたたかくなる言葉を「ふわふわことば」と呼び、反対に、言われると悲しくなったり、イライラしたり、心が傷つく言葉を、トゲトゲがいっぱいついてい
る「チクチクことば」と呼んでいます。(『わたし出会い発見』(大阪府人権教育研究協議会編)より)

取組みを終えて

「みんなが安心して過ごせるクラス」にするにはどのようにしていけばよいただろうと試行錯誤してきたが、まずはAさんにとって安心して過ごすことができるクラスづくりをめざした。Aさんの実態を把握し、適切な支援を考え、一年間、「お互いを見合い、聞き合う関係づくり」「協力して達成感の得られる経験」「一人ひとり違うことに気づき認め合える空間づくり」を授業として取り組んだ。

その取組みを通して見えてきたことは、児童たちどうしの関わり方や関係から担任が学ぶことが多かったこと。そして、Aさんへの支援が周りの児童たちへの支援にもつながることを実感した。同時にAさんと周りの児童たちどうしのつながりが深まっていくことも実感できた。

「Aさんにとって安心できるクラス」というのは「みんなが安心して過ごせるクラス」であり、「みんなが安心して過ごせるクラス」は「Aさんにとっても安心できるクラス」なのだと改めて感じることができた。

【ポイント】

福祉教育は従来、障がい疑似体験や福祉施設訪問といった体験学習が一般的であった。しかし、十分な振り返りを行わなければ、体験が目的化してしまい、いわゆる「貧困的な福祉観の再生産」に陥ってしまう可能性もある。

この取組みは、同じクラスにいる仲間を中心にとらえ、様々なアクティビティ(ワーク)を取り入れて、クラスの中で個々の違いを認め、「障がい理解」の取組みから、「障がいのある友達の理解」へと導いている。

「Aさんにとって安心があるクラス」は、「みんなが安心して過ごせるクラス」というメッセージは、ユニバーサルデザインやノーマライゼーション理念につながる大切なメッセージである。

自分たちにできることは何だろう、伝えようAさんのこと ～ 支援学級との交流及び共同学習～

学年等

3年生 特別活動など

～ 支援学級児童Aさんが安心して過ごせる学級、学校づくり～

ねらい

一人ひとりが安心して過ごすことができる学級、学校づくり

友達の状況や思いを理解し、ともに生活し学習するにはどのように行動すべきか考える。

互いに認め合い、思いやり、助け合う心をもつ。

【指導について】

3年生になり、入学以来初めてのクラス替えがあった。男女の仲はよく、休み時間や放課後も「ちゃん」とお互い呼び合い遊んでいる。また、困っている児童がいると、手助けもできる優しさがある。しかし、集団行動が苦手な児童、自己主張により自分の居場所を確認する児童、自分の気持ちを抑えることが苦手な児童、複雑な生活背景を抱えながら学校生活を送っている児童もいる。このような児童の中には、自分のことで精一杯で、支援学級在籍のAさんのことを思いやることができない児童もいる。

そこで、自主教材「学級（支援学級）のこと、Aさんのこと」を作成し、友達の状況を理解し、友達の思いや願いに寄り添いつつ、その上に自分たちにできることを考えさせた。

【Aさんについて】

Aさんは目や足の手術と、祖母や兄が住んでいる外国への渡航のため、学校を長期欠席することが多く、友達と関わる機会が少ない。また、相手の話を理解することや自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手である。自分の思いを友達に伝えたいAさんの気持ちを受け止められる学級・学年づくり、よりよい仲間づくりのためには相互理解が必要である。

そこで、学年のみんながお互いを知り、より仲良くなるための取組みの一環として、休みがちで交流の少なかったAさんについて知ることができる機会を設定した。

取組みの流れ

< 全8時間 >

第一次 Aさんについて知る・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間

第二次 自分たちのできることを考える・・・・・・・・・・・・ 5時間

第三次 Aさんのことを伝えよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間

取組み

第一次 2時間 Aさんについて知ろう

知る【（支援）学級のこと、Aさんのことを知る】 2h

Aさんの生い立ち、家族の思いを知ろう。（保護者と話し合い、聞き取った内容を伝える）

事前に、Aさんの保護者の思いを聞き取り、指導の方針やあり方について話し合い、その内容を指導に生かすことについて承諾を得ておく。

支援学級でのAさんの活動の様子、得意なことなどを知ろう。

第二次 5時間 自分たちにできることを考えよう

考える 【Aさんの思いを話し合い、自分たちのできることを考える】 2h

Aさんが得意なことや苦手なことについて知っていることを話し合い、Aさんの思いを考える。自分たちがAさんのため、友達のためにできることは何かを考え、話し合う。

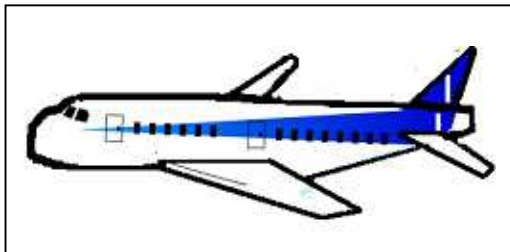
私たちがわかったAさんのこと(能力を発揮していること、気持ち、家族の思いなど)を、何も知らない下級生に知ってもらおうよ！そして思いやりのある学校にしていこうよ！

動く 【自分たちで考えたことから、Aさんについての紙芝居を作る】 3h

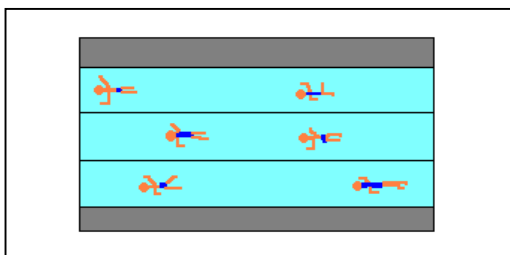
Aさんの状況や思いについてわかったことを下級生(1,2年生)に伝えるため、グループで紙芝居風に描き、伝える内容を画用紙の裏に書き込む。(Aさんとともに作成する)

学 習 活 動	指導のポイント
Aさんについて、1,2年生に伝えることをグループで出し合う。 画用紙に描くことを選び、書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんの好きなことや得意なこと、通常の学級での様子など、Aさんの個性が伝わるような視点で考えさせる。 ・低学年にわかりやすい表現にするよう伝える。

<紙芝居の例>



Aさんは何回もひこうきにのっています。
Aさんは、ひこうきがとても好きです。



Aさんはプールで、泳ぐ練習をしています。
足がつかなくてもいっしょけんめい泳ぎます。

第三次 1時間 Aさんのことを下級生に伝えに行こう

深める 【下級生に、紙芝居でAさんを理解してもらおう】 1h

Aさんが能力を発揮していること、状況や気持ち、家族の思いを伝える。学年の仲間として、Aさんが困っている時にはどのようにしてほしいかをわかりやすく伝える。互いに認め合い、助け合い、思いやりのある学校にしようと提案する。

紙芝居を見せながら、1,2年生にわかる言葉で、心を込めてゆっくりとはっきりと伝える。

取組みを終えて

< 児童やクラスの変化 >

〔自己主張が強く、友だちとトラブルになることが多かった児童Bの変化〕

BさんはAさんに対して、からかって攻撃的な言葉を使うことが多かったが、この学習を進めるにつれて、Aさんの給食当番を手伝ったり、進んで手助けしたりするようになった。また、Aさんを気にかける発言も増えた。Aさんが転校してしまった後でも、「Aさんは新しい学校で友だちできたかな？いじめられてないかな？」と、Aさんのことを気にかけている発言がみられた。

また、少しずつ誰に対しても優しく接することができるようになり、「Bさんがこんなことをしてくれたよ。」と教員に報告する友達が増えてきた。

〔児童Aの変化〕

Aさんは優しく接するようになったBさんと活動をすることが増えた。友達の関わりの変化を感じ、穏やかな表情も増え、以前より、自分からクラスみんなに関わっていくようになった。

〔クラスの変化〕

クラスの児童は、Aさんが苦手なことをするとき、励ましの言葉や優しい声をかけたり、手助けする場面が増え、Aさんができたときにはともに喜ぶ姿が増えた。

また、Aさん以外の友達どうしについても良いところを積極的に見つけるようになり、友達が困っていたら助けるなど思いやりを持って接することができるようになった。

< 取組みを終えて >

支援学級担任と協働で通常の学級での授業を行い、普段はなかなかわからない支援学級でのAさんの一生懸命な姿を児童に知らせることができた。

また、教員からの一方的な話を聞くのではなく、同級生で仲間であるAさんについて、紙芝居にして下級生に伝えるという活動の設定をすることで、様々な状況にあるAさんの思いや周りの人たちの思いを自分で考えることができ、その思いをより共感することができたように思う。

さらに、同級生のために紙芝居を使ってAさんの思いを一生懸命に伝える3年生を見て、下級生は優しさなどを訴えようとする何かを感じるすることができたに違いない。

さらに、Aさんを中心にすえた取組みから、Aさんに対してだけでなく仲間が困ったときへの気づきにつながってきており、これからも様々な福祉教育の取組みを進める中で、継続して思いやりの心を育てていきたい。

【ポイント】

平成17年に出された中央教育審議会の「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」では、「学校全体で特別支援教育を推進することにより、いじめや不登校を未然に防止する効果も期待される」と示されている。

この取組みは、障がいのある児童を学級の仲間の中心に位置づけて、「ともに生活し、ともに学ぶこと」の大切さを自分たちの学級だけでなく他学年に対しても働きかけるといった、福祉教育と特別支援教育を一体化した学校全体への「障がい者を取り巻く課題と、障がいについての理解を深める教育」としての実践である。

ともに生きていく、やさしい町に ～視覚障がい者との出会いから行動へ～

学年等

4年生 総合的な学習の時間・国語

ねらい

障がい者や高齢者の状況や思いを理解するとともに、生き方に共感し、優しさを培う。点字への理解を通じて、文字をもつことの大切さ、すばらしさを知る。

いろいろな人がいっしょに暮らしている町であることを知り、みんなが暮らしやすい町について考える。

ともに生きていくために、様々な状況の人たちにどのように接したらよいか、自分たちにできることはないかなどを考え、行動する態度を養う。

取組みの流れ

<全9時間>

第一次 障がいについて正しく知る。Aさんと出会う。・・・3時間

第二次 高齢者について理解する。

いろいろな人が暮らしやすい町とはどんな町か考える。・・・2時間

第三次 自分たちにできることをやろう。・・・4時間

取組み

第一次 3時間 障がいについて知ろう

知る【当事者が綴った本から障がい者の生活や気持ちを知る】 2h

「ぼくたちのコンニャク先生」（写真/文 星川ひろ子 小学館）

（脳性まひの保育園の先生と園児たちの温かな交流を描く写真絵本）

「ふしぎ ふにゃふにゃ フランケン」（企画/原案 近藤雅則 作/絵 立花尚之介 岩崎書店）

（脳性まひの保育園の先生が、障がいについての子どもの質問に明るく答える絵本）

「五体不満足」「乙武レポート」「だから、僕は学校へ行く！」（乙武洋匡 講談社）

（先天性四肢切断の著者が、自身の生活体験などを綴った本）

気づかせたいこと

障がいのある人は、『かわいそう』なのではない。
やりたいこと、やれることを工夫しながらやっ
ている。
周りの人たちは、自然に受け入れて助け合っている。

『正しく知ること』が、相手に対して優しくなれる
一つのきっかけになると考えて・・・



出会う 【地域に在住している視覚障がい者Aさんからお話を聞く】 1h

事前に、社会福祉協議会の方、聞きとりをお願いしているAさん、サポート役のボランティアの方と打ち合わせを十分に行った。

気づかせたいこと

能力を発揮しているAさんの前向きさ。
工夫された生活の道具があること、
サポートしてくれる人がいること。
障がいがあることで不便なことはあるが、
決して不幸ではないこと。
サポート役のボランティアの方の言葉から、
声をかけることの大切さ。

『人との出会い』は、心を動かす貴重な体験であり、
自分に素直になれる瞬間だと考えて・・・。

Aさんが点字をうっているところを見ている
子どもたち。その速さにびっくり！



< 児童の感想 >

「Aさんと出会って」

知らないことばかりでした。目に障がいがあると「イヤ」という気持ちが多いと思っていました。でも、その気持ちは少ない。今日来たらニコニコと笑って元気いっぱいという感じがしました。信号をわたるとき、空気で「青やな～」とかわかるとか、すごいです！うち、ぜったいわからないです。

ぼくは今日初めて目の見えない人に会いました。Aさんが一番最初です。一番いんしょうに残ったのが、オルガンをひいてくれたことです。Aさんのジョークはすごくおもしろかったです。とくに「幸せいっぱい、はらいっぱい。」と言ったのが、一番おもしろかったです。スーパーやコンビニで会ったら話しかけます。

第二次 2時間 高齢者について理解し、暮らしやすい町を考えよう

知る 【高齢者の気持ち、状況について理解する】 1h

「ありがとうのヒミツ」(正本ノン アニメビデオ 社会福祉法人 中央共同募金会)を見る。

(小学生と高齢者がぶつかって体が入れ替わってしまう高齢者理解の話)

気づかせたいこと

高齢者の気持ちやおかれている状況。 「ありがとう」に込められた思いについて。
老人と入れ替わってしまった勇太が体験して感じたこと。(不便で困った、うれしかった)
今までわからなかったクラスの友だちのよさ。

同じ町で暮らしていてもすれちがうだけでは、相手のことはわからない。
顔を見て、話をしてこそ、相手のことがわかってくる。

考える 【いろいろな人が暮らしやすい町とはどんな町か考える。】 1h

私たちの町は、いろいろな人(障がい者・大人・子ども・高齢者)が暮らしやすい町(不便なことや困ることが少ない町)だろうか？

気づかせたいこと

段差（あちこちにある。歩道にもある。）
信号（渡りにくいところがある。音の鳴らないところも多い。）
駅（近くの駅はエスカレーターもエレベーターもない。）
自動販売機（コーラとコーヒーの区別がつかない。）

社会福祉協議会の方から、「ええやん ちがっても」というテーマでお話を聞く。

社会福祉協議会の方(Bさん)からお話を聞きました。



< 児童の感想 > 「Bさんと出会って」

私は障がいがあるということが最初かわいそうだなと思ってました。でも、今日、かわいそうじゃないとわかりました。

Bさんが言ってたのは、「ええやん ちがっても」と「みんなが笑える町に」です。私もこういうことが言える人になりたいです。人と人が助け合うということは、とてもすてきなあとと思いました。

私も困っている人がいたら、助けられる人になりたいです。ガンバッテみます。

「補助犬ができること、あなたにできること」を見る。(DVD2007「24時間テレビ」チャリティー委員会)

(小学生が補助犬を通じて視覚、聴覚、身体障がい者のこと、自分のできることを考えるきっかけとなる内容)

みんなが暮らしやすい町にするために、自分たちに何ができるかを考える。

気づかせたいこと

DVDに出てくる耳や目や手足に障がいのある人が伝えてくれていること。

- ・「こんにちは」という挨拶の一言だけでも、そこに人がいるなということがわかって、身の安全をはかることができる。
 - ・「どうしたのかな?」「大丈夫かな?」と思う瞬間の温かい気持ちを、素直に行動であらわせてくれたら、うれしい。
 - ・ちょっと手助けしてくれることで、ぼくたちの不便な生活が改善される。
 - ・「もし、自分だったらと考える」その気持ちがあれば、みんなが幸せになれる社会になると思う。点字をやってみたい。
 - ・3年生の国語の勉強でできた点字。先日、Aさんにうつところを見せてもらった。道具やお金がなくてもできることがある。(席をゆずる。声をかける。)
- 暮らしやすい町というのは、人がやさしい(人の気持ちがやさしい)町である。

< 児童の感想 > 「DVDを見て、自分のできることを考えて」

「ありがとうのヒミツ」のビデオを見て、私はぜったい「ありがとう」を言おうと思いました。私らにとって、この町は住みやすいか?私は住みにくいと思います。段差はいっぱいあるし、信号の青の時に音がならないところもあるし。もっと住みやすいようにしてほしいです。(次ページ)

でも、先生が言ったように、自分らでやれることはやりたいです。終わって教室に帰るとちゅう、「ありがとうの気持ち」を忘れない、自分でできることはやる、このことを守りたいと思いました。ちがっていても区別しない。5、6時間目の授業、いろんなことが心に残りました。

第三次 4時間 自分たちでできることをやろう

動く 【今、挑戦している『点字』を生かせることはないだろうか】 4h
点訳本を作ろう。

点訳中。「いけてる?」「OK!」



みんなで作った点訳本は公民館と児童館へおいてもらえることになりました。



自動販売機に点字シールをはろう。



できあがった点字シールを自動販売機にはりに行きました。



自動販売機のメーカーに手紙を書こう。

< 児童の手紙 >

「自動販売機メーカーへの手紙」

はじめまして。私たちは 小学校の4年生です。私たちは総合学習の時間に、視覚障がいのある人と出会いました。その時、その方から、たとえば、お茶がわいたことが目ではわからないので、音で知らせる道具を使っているということを知り、私たちはふつうに生活しているけれど、不便なことがたくさんあるんだなと感じました。出かけた時に、自動販売機でお酒とジュースをまちがえて飲んだということも聞きました。何とかならないだろうか、考えました。飲み物の種類を声で知らせたり、点字に表すと、こんな不便なことはなくなると思います。

まず、私たちにできることとして、点字シールを自動販売機にはることをやっいてこうとしているのですが、点字のついている自動販売機ができたらいいのかなあという意見がでました。そこで、そういう自動販売機を作ってほしいという願いをすることにしました。ぜひ、考えてみてください。お願いします。

取組みを終えて

「人と出会う」ことで「相手のことを知る」ことができ、「知る」ことで「人にやさしくできる」ようになる。教員である自分もそうだが、児童たちにもそうあってほしいと願い、人との出会いを大切にしてい

た。児童たちには、視覚障がい者であるAさんと出会い、Aさんが「できないこと」も「できること」もリアリティをもって知り、「どう生きてきたか」にふれて人としての知恵について学び、話し合っていく中で、いろいろな状況の人が住んでいる町が暮らしやすい町であるために自分たちにできることはないか、考えさせてきた。

この一連の取組みは、社会福祉協議会の方と協働で授業を組み立てていった。「従来の福祉教育は車いすやアイマスクを使った疑似体験の活動が中心だったが、それでは障がいの不便な面が強調されて、『障がいのある人はかわいそう』という先入観を児童たちがもつだけで終わってしまいがちである。

そこで、当事者の生活にふれて、児童たちの気づきを促すところから始めてはどうだろうか。」という事務局長さんの言葉は、私たち教員と同じ視点であることがわかり、大きな力となった。

さらに、協議を深めていく中で、児童たちの活動を広げていくためのアイデアをもらうことができた。また、「点字をやってみよう」という児童たちの思いに応えようと、点字板を貸してくれるところも探して下さったおかげで、点字板を借りた地域の高校とのつながりもできた。

児童たちが、自動販売機のメーカーに手紙を出し、メーカーから「点字シールをはるという活動をいっしょにやりましょう。」という返事がきたということも、児童たちにとって大きな手応えとして心に残ったことであろう。

今後、自分たちの町が誰もが住みよい町にするために、児童たちが気づき、考え、行動できる人に成長していくことを期待している。

< 児童の感想 > 「4年生の1年間の中で、1番心に残ったこと」

私が4年生で1番心に残っていることは、Aさんに聞き取りをしたことです。なぜかというと、Aさんは「視覚しょうがい」というしょうがいのある人です。生まれつき目が見えません。だけど、Aさんは子どものころバイオリンを習っていたそうです。そして今は、家でごはんをたいたりしているそうです。最後にAさんがオルガンをひいてくれました。私たちが手紙を書いて、Aさんから返事が来て、先生が読んでくれました。Aさんからの手紙はとてうれしかったです。私が「視覚しょうがいが、いやだと思ったことはありますか。」と聞きました。Aさんは「いやだと思ったことは、ありません。」と言いました。いやだと思ったことがないということが、すごいなあと思いました。

もうどう犬・ちょうどう犬・かい助犬のDVDを見て、社会福祉協議会のBさんから話も聞きました。「ええやん、ちがっても」というのを教えてもらって、私はなくなったおじいさんのことを思い出しました。おじいさんは、病気で足を半分切っていて、うまくしゃべることができませんでした。それを私と弟がこわがって、お母さんやお父さんの後ろにかくれていました。4年になって、おじいさんをこわがらないようになりました。Bさんに聞いた「ええやん、ちがっても」というのは、見た目はちがっても、思ったり感じたりすることはいっしょで、みんな同じようにくらしている。「ええやん、ちがっても」というのは、そういうことかなと思いました。

【 ポ イ ン ト 】

学校と社会福祉協議会が事前に綿密な打ち合わせを行い、子どもたちに伝えたいことを福祉と教育の両面から考えて授業案を作成している。このような事前打ち合わせによって、子どもたちだけでなく教員も福祉教育の重要性を理解することができる。

「知る 出会う(体験) 考える」といった体験学習のプロセスに加え、最後に子どもたち自らが企業に手紙を書くなど、社会に対して「行動」している。「自分たちの気づき」が行動することによって実際に役に立つ(社会貢献)ことを実感し、子どもたち自身が自己有用感を感じられるプログラムになっている。

であい・つながり・ともに生きたい ～障がい理解と交流～

学年等

4年生 国語・道徳・総合的な学習の時間・特別活動など
 「伝え合う」ということ <資料> 手と心で読む（大島 健甫）
 （国語：光村図書 4年上）
 「ぼくのお姉さん」（丘 修三 偕成社）

ねらい

様々な立場の人の状況を知ることにより、共生の視点をもつ。
 自分の思いを伝え、仲間の思いを受けとめ、安心できる仲間関係をつくる。
 地域の人との出会いや交流を通して、様々な立場の生き方にふれ、思いを知ることにより、自分の生活をふりかえる。

【指導について】

地域の方々をはじめ、学習の中で出会った方々のあたたかさや力強い生き方にふれることにより、その方々の願いや思いを気づかせたい。

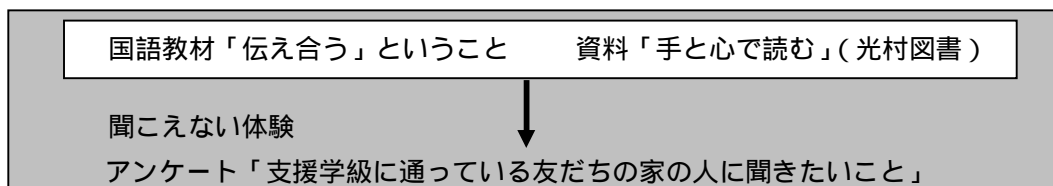
学習の中で出会った人の思いに、自分自身の思いや願いを重ね、自分の生活を見つめ、家族や友達とのつながりについて考えさせたい。

総合的な学習の時間では、国語科の教材と関連づけて進めていく。

取組みの流れ

<全 38 時間>

第一次（7時間）



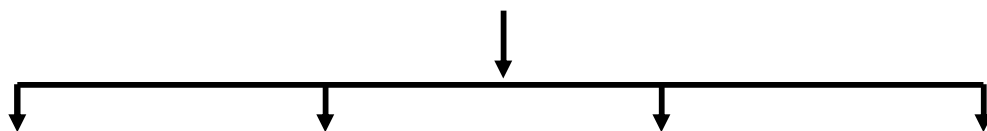
第二次（6時間）

道徳教材「ぼくのお姉さん」 作：丘 修三（偕成社）

感想...自分ならどうするか考えながら書く。
 保護者に感想を書いてもらう。

第三次（25時間）

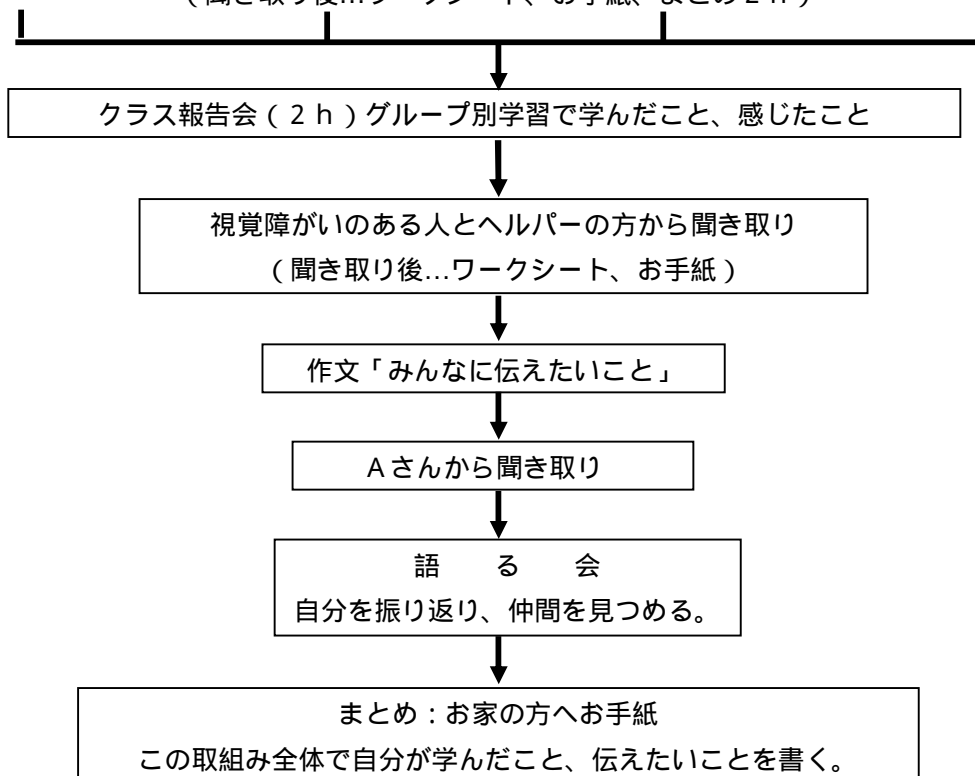
支援学級の保護者から聞き取り
 （聞き取り後...ワークシート、手紙、グループ別学習希望アンケート）



【テーマ別グループによる学習】

身体・知的障がい	精神障がい	高齢者	外国の方
身体・知的障がい者作業所で働く方について教材学習 (母の手記より)	精神障がい作業所のメンバー、スタッフから聞き取り	高齢者と関わる仕事をする保護者から聞き取り	タイの方とそのサポーターから聞き取り
身体・知的障がい者作業所訪問。 見学・聞き取り	精神障がい者作業所訪問。見学・聞き取り・交流	特別養護老人ホーム訪問。見学・聞き取り・交流	大学訪問。 留学生(中国)から聞き取り

(聞き取り後...ワークシート、お手紙、まとめ2h)



展開例

第一次 7時間 国語教材「伝え合う」ということより

【目標】

文章を読んで伝え合う方法に興味をもち、自分の課題をもって調べたり、発表したりできる。
知らせたいことの内容がわかるように話したり、友だちの発表の大事なところを聞き取ったりできる。

自分の考えや思いが、相手に伝わるように工夫して書くことができる。

中心となる語や文をとらえて、話の内容を読み取ることができる。

相手やその場に合った適切な声の大きさや速さに気をつけて話ができる。

「伝え合う」ということについて、本文を読んだ第一印象を話し合う。 1h

伝え合い、分かり合い、支え合うことについての自分なりの考えをもち、話し合わせる。
本文を読んで第一印象を書き、これから学習していく内容について見通しをもたせる。

資料の最初のまとまりを読み、点字について知っていることを話し合う。 1 h

身の周りの物、生活経験などを思い出す。その際、実物や写真など、参考になるものを用意することにより、理解を深める。(点字を活用している物や施設などの写真や実物を用意)

資料の中のまとまりを読み、筆者の苦労や思いを話し合う。 1 h

筆者が文字を失う悲しみ、母親の愛情、再び文字を持つことができる喜びを、文章から読み取らせる。

資料の最後のまとまりを読み、点字について知る。 1 h

点字のしくみについて、実際に書いてみたり、読んでみたりしながら理解させる。
(点字を打つ道具を用意)

点字について、図書館やインターネットで調べてまとめ、発表する。 2 h

調べたことについて、ワークシートにまとめ、言いたいことを簡潔にまとめて発表させる。

疑似体験を通して、視覚障がいの方の思いを話し合う。 1 h

ともに生きるという視点をもてるよう、話し合わせる。

< 教員の振り返り > 「『伝え合う』ということ」を学習して

子どもたちは、点字にとっても興味をもち、読み進めていった。その中で「視覚障がいのある人が白い杖をついているのを見たことがある。」「目が見えにくいのにポストに手紙を入れていた人がいた。」「缶かんにも点字がついていた。」と意欲的に身の周りの物や人に注目していった。そんな中から「視覚障がいのある人から話を聞いてみたい。」という意見も出てきて、「出会って、思いにふれる場があればいいね。」と学習を終えた。

また、この学習で、支援学級に在籍する4人の仲間について考える児童もいた。「1学期に支援学級に見学に行ったが、知らないことも多かった。」「障がいって何だろう。」「他のクラスの子のことも知りたい。」という子どもたちの思いを受け、支援学級に在籍する児童の保護者に聞き取り学習に協力いただけるようお願いした。

第二次 6時間 読み物教材「ぼくのお姉さん」より

【目標】 (ダウン症の姉をもつ小学5年生の正一の視点から書かれた物語)

自分とは違う様々な個性や立場を持った人への理解を深める。

他の人とは違う自分の個性や立場を見つめ、家族や友達との中で、自分らしく生きていくことについて考える。

ともに生きることについて、自分の思いを伝え、仲間の思いを受けとめながら話し合う。

本文を読んだ第一印象を書いて話し合う。 1 h

文章全体の構成をとらえて、一番心に残ったところについて、話し合わせる。

文章全体の構成をとらえ、各段階の内容を読み取り話し合う。 3 h

各段階で、中心となる言葉や文をとらえて、ぼく・姉・母・父の思いを自分なりにまとめ、発表させる。

第一段落：ぼくから見たお姉ちゃんの特徴 第二段落：ぼくとお姉ちゃんのエピソード

第三段落：お姉ちゃんの指きり 第四段落：お姉ちゃんの初給料とごちそう

読み取ったことを、お家の人に手紙で伝える。 1 h

今まで話し合ったことなどを参考に、自分がわかったことや、考えたことを書かせる。
手紙の返事をお家の人からいただくことも伝えるように指導する。

お家の人からの手紙を読み、感想を交流しあう。 1 h

交流してもよい手紙であるかどうか気をつけて数点を選び、承諾を得て、読んで聞かせる。
この後、実施する総合的な学習の時間で行う取組みにつなげられるようにする。

< 教員の振り返り > 「ぼくのお姉さん」を学習して

この話は、ダウン症の姉をもつ小学5年生の正一の視点から書かれた物語である。姉のよさをわかりつつも、友だちにからかわれた経験から自信が持てず悩む正一。自分の兄弟姉妹について作文を書くという宿題も、なかなか筆が進まない。しかし、姉が作業所で働いた初任給で家族にごちそうしてくれた後、心が動き作文を書き始める。「ぼくのお姉さんは障がい者です。」と…。

この話に登場する正一は、子どもたちと年齢も近く、心打たれる教材であり、障がいのある兄弟姉妹を持つ児童にとっても、エールを送ってくれる教材であった。また、仲間関係について考えさせられる場面もあった。

< 児童の感想 > 「ぼくのお姉さん」を学習して

「Bがお姉ちゃんの口調をまねて、Aと顔を見合わせてわらいころげた。」

わたしは、この文を読んだとき、AとBが笑ったのはゆるせないと思った。もし、正一だったらもっともゆるせないと思う。なぜかという、わざわざ口調をまねることなんてないと思うからだ。

わたしのお母さんの弟が心の病気なので、わたしもその正一の気持ちがわかる。(後略)

< 保護者の感想 > 「児童からの手紙」を読んで

学校でも科目の勉強を一生懸命するだけでなく、いろいろなことを正しく学んで、お互いに助け合い、思いやる温かい心をたくさん育ててほしいと願っています。そして、私たち大人もそれをしっかり見守り、協力できる人でありたいと思います。子どもたちと一緒に学んでいくことが大切ですね。

人と少し違うところがあると、それをからかってしまうことがあります。人は一人ひとり違うのだから、違いがあって当たり前だと思っています。私は自分の子どもたちに、世の中には自分を含めていろいろな人がいて当たり前なのだから、誰とでも同じように仲良く、時には助け合っていてほしいなと思っています。

第三次 25 時間 総合的な学習の時間などより

テーマ別グループによる学習（例：精神障がい理解）

【精神障がい者小規模通所授産施設（作業所）について】

いつも、温かい雰囲気にも包まれている作業所。メンバー（利用者の方）さんは、心悩ますことなどに向き合いながらも、前向きに日々通っておられる。スタッフ（勤務している方）さんは、優しくそして力強く、メンバーさんを支えておられる。そこには、つながり、信頼関係がある。

【聞き取りについて】

作業所からスタッフさん1名とメンバーさん2名に来ていただき、聞き取りをした。メンバーさんは、児童たちにわかりやすいように言葉を選びながら、作業の内容や自分の生活について、また作業所で仲間と出会えた喜びについて話して下さった。

スタッフさんからは、精神障がいとは、寂しいことや心悩ますことが重なり「心のハンドルを切るのが難しく」なった状態であるということなどを教えていただいた。

< 児童の感想 > 「作業所」のスタッフさんのお話を学習して

(前略) 作業所の方が一番うれしかったことは「仲間ができたこと」でした。私は、仲間は大人になっても大事なんだなあと思いました。 作業所の人が言っていたように「精神障がい者」という言葉はいいのかわるいのか考えたいです。

(前略) お話を聞いて心に残ったことは「みんな(仲間)がすごくやさしい」ということです。わたしはそれを聞いて、「そういう仲間をわたしもほしいなあ。」と思いました。(後略)

「障がいはとく別じゃない。」と作業所の人と言っていた。お母さんは、弟に障がいがあっても、決して甘やかさない。私と同じように育てる。その理由は聞いていないけど、障がいはとく別ではないというのもあるんじゃないかと私は思った。(後略)

【訪問・交流について】

作業所に行き、メンバーさんから活動(製品づくり、畑仕事など)やりハビリのこと、ボランティアに手伝ってもらいながら地域に出て活動していることなどを教えていただいた。また、製品にもふれさせてもらった。児童たちは、さおり織りの帽子やかばん、ビーズ製品に「うわあ、すごい! かわいい!」「どうやってつくるん?」と歓声をあげていた。その後、じゃんけんサインゲーム・風船バレーで楽しく交流した。我が家のようなあたたかな雰囲気の中で、やさしさを感じていた。

ここを訪問したグループには兄弟姉妹が支援学級に在籍している児童がいる。その児童にはこの出会いを通して、家族との関係を見つめ、胸を張ってほしいと願った。



< 児童の感想 > 「作業所」交流後のワークシートより

みんな入ったしゅんかん「かわいいね。」とかしゃべりかけてくれて、明るいし、しゃべりかたもやさしいし、楽しく遊べたから、いっしょに交流してよかったと思った。みんながやさしいから、安心してしゃべりかけられた。障がいだからなにもできないわけじゃなく、みんながひとつ手伝ってくれるだけでできることがふえるときいた。

作業所的人是みんなやさしくて明るい。仲がよくて、物をつくるのも上手だし、今までいろいろなことを乗り越えてきたんだなあと感じる。(中略) いやなことを言われても気にしないという人もいた。自分はいやな事を言われたら、すごく気にするけど、話をきいて気にしなかったら少しはいい気分になれるかなあと思った。

前は、たんぼぼ(支援学級)の子と日直が同じだったけど、どうやってやればいいのか、どんなやり方でやればいいのかわからなかったけど、今日、作業所に行って少しわかってよかったです。(中略) 家族に「障がいのある人たちはあたたかいんやでえ。」と教えてあげたいです。

ぼくは 作業所にいきました。いろいろな障がいがある人がいました。その障がいがある人は、ぼくたちがきて楽しそうにしていました。障がいがあっても特別じゃないと思いました。

取組みを終えて

児童たちは、多くの人に出会い、その人のくらしや願い、やさしさ、あたたかさに分れることができた。さらに、たくましい生き方に励まされ、自分自身のこれまでの仲間や家族とのつながりをふり返り、「語る会」では自分の生活や思いを出し合うことができた。そして、そこには聞いてくれる仲間がいた。共感して、気持ちを返してくれる仲間がいた。児童たちは、支えてくれる仲間の確かな存在を実感したに違いない。

< 児童の手紙 >

取組み後の母にあてた手紙より

この学習で、人のことを考えることとかを学んで、作業所に見学に行ったりしたことを話すと、お母さんはちゃんと聞いてくれたからうれしかった。弟のことをみんなに話して、弟にやさしくするようにしている。この学習で家族ともっとつながれた。

この学習をして、命の大切さがわかったよ。「産んでくれてありがとう。」(後略)

【その後の取組みとして】

その後、5年生となった児童たち。「仕事ウォッチング～心・技・体」の取組みで、地域の仕事場に出かけていった。作業所では、製品づくりを手伝わせていただいた。体験した児童たちは、帰ってくるなり、目を輝かせながら「家みたいやったわ。また来てもいいって!」と喜んでいった。

< 児童の感想 >

体験後のワークシートより

さおりという道具で、布をおりました。はじめは、どうやってやるかぜんぜんわからなかったけど、やさしく、わかりやすく教えてくれたので、すぐなれて楽しかったです。(中略)「上手だね。」とか「色をえらぶのが上手」とか言ってくれました。

働いている人は、よく働いている手や、やさしい手をしていました。楽しそうに仕事をしていました。働いている人は、みんなでにぎやかに食事できたり、しゃべったり、自分の作品ができるということが、喜びだそうです。苦労するのは、作品がうまくできない時や、考えがうまくまとまらない時だそうです。

「出会い」から、児童たちが学ぶことは多い。作業所との出会いが、児童たちの心を豊かにし、家族や仲間との関係を見つめる力を育ててくれた。この学習の本当の成果は、これからの児童たちの姿に表れてくるものと期待している。また、同時に見えてくる課題に、前向きに取り組んでいきたい。そして、今後とも児童たちを、「どのように地域と出会わせていくか」について継続して考えていきたい。学校全体として系統的に地域との交流を進めていく中で、児童たちを「地域の子」として、教職員、保護者、地域住民が丸となって、あたたかく支え、見守っていければと思う。「違い」を「豊かさ」として受け止められるような子どもに育つことを願って…。

最後に、毎年、児童たちを快く受け入れてくださる 作業所、その他の施設の方々に心より感謝している。

【ポイント】

この取組みは福祉教育のテーマに即して、国語・道徳・総合的な学習の時間・特別活動といった各教科などと関連させて指導を行っている。これは一年間の年間指導計画の中に福祉教育や人権教育が明確に位置づいていることを示しており、各教科などが年間指導目標にそってうまく連携を図り、実践されている。

国語の授業で個々の問題意識を高めた児童が、実際の調べ学習や交流学习を通して自分自身の問題として考え、行動化(「仕事ウォッチング～心・技・体」)も行っている。このように個々の学びを知識として理解するだけでなく、実際に行動化することで内面化させることも福祉教育では重要な教育目標である。

車いすから見た新しい世界 ～ 障がい（肢体）理解とバリアフリー～

学年等

4年生 総合的な学習の時間など

ねらい

障がいへの理解を深める。
車いすを体験することをきっかけにして、身の回りのバリアフリーの大切さに気づき、みんなが暮らしやすい町について考える。
車いすを使っている人への必要な援助をするための知識・技能を身につけ、ともに生きていくために、どのように接していったらいいか、自分たちにできることはないか、などを考える。

取組みの流れ

<全7時間>

- 第一次 障がい（肢体）について知る。Aさんと出会う。・・・2時間
- 第二次 車いすを体験する。・・・2時間
- 第三次 身の回りのバリアフリーの工夫について調べ、自分たちの町を住みやすい町にするためにできることを考える。・・・3時間

展開例

第一次 2時間 **障がいについて知ろう**

知る【障がい者の生活や気持ちを知る】 1h

パラリンピックに向けてのドキュメンタリーを視聴し、スポーツにチャレンジしている姿から学ぶ。

気づかせたいこと

障がいは決して『かわいそうなこと』ではない。障がいのある人の意志や周りの支えにより人生を切り開いておられる。

このような番組を見るのが初めてという児童がほとんど。障がいのある人たちのチャレンジする姿に児童たちは、ただただ「すごい」と驚き、感心するばかり。児童たちは、その本人や周りの人の、あたたかさやひたむきさなどにふれて、何かを感じ、考えたことでしょう。

<児童の感想>

北京オリンピックならテレビでよくやっているけど、パラリンピックはニュースでちょっとしかながされないのはなんでだろうと思った。車いすバスケットで、何度こけてもあきらめず起き上がったのがすごかったです。人間ってその気になれば何でもできるんだと思いました。

出会う【地域に在住の車いすを使っているAさんからお話を聞く】 1h

車いすに乗りながらフライングディスクをあやつるAさんから、車いすでの生活の様子と日頃感じている思いなどをお聞きする。

普段の生活で障がいのある人から見たマナー違反の例として、スーパーの障がい者用駐車スペースに健常者が駐車していることや、障がい者優先エレベーターに健常者がいっぱい乗っていて車いすが乗りにくいときがあることなどを紹介。

障がいの有無に関わらず、一つのことに一生懸命に取り組むことの大切さを述べられた。

気づかせたいこと

自分たちの身近な方の話から、車いすから見える世界と思い。
みんなが暮らしやすい町にするには、バリアフリーの考えが必要である。
不便な面がありながらも能力を発揮している。
それをサポートしてくれる人がいる。
障がいがあることで不便なことはあるが、決して不幸ではない。



< 児童の感想 >

「Aさんと出会って」

今度、フライングディスクの大会があるようなので、優勝してくださいね。マナーが悪い人がいるということをお母さんに話しました。大人でも気づいていないことがあるようでした。

僕たちにとっては、歩道の端に犬のふんがあるのはあまり気にしてなかったけれど、それは車いすのタイヤがとおるあたりにあるので、とても困ってしまうということをはじめて知りました。

これからは車いすに乗っている人のお手伝いをしたいと思います。

第二次 2時間 車いすを体験しよう

体験する 【車いすに乗っている人の状況について、体感してみよう】 1h
実際に車いすに乗って階段や狭い場所、段差のある場所を通り、ドアの開け閉め、トイレで手を洗ってみるなど、いろいろな場所で様々な行動を試みる。
車いすを使っている人への必要な援助をするための知識・技能を身につける。

感想 【実際に車いすに乗ってみて、自分で歩いたときとの違いを知る】 1h



段差があったら一人ではあがれないよう!



気づかせたいこと

車いすに乗っている人にとって、学校内で不便を感じる場所はどこか、なぜか。
車いすを使っている人の気持ちやおかれている状況。
操作の途中で、どのように声をかければいいのか、どこに立てば一番いいのか。

< 児童の感想 >

「車いすに乗ってみて」

「この学校は古い」と改めて感じました。いちいちティッピングレバーをふまないといけないので、とても大変でした。もうちょっとがたがたの道や段差がなかったらいいのと思いました。途中で溝にはまって、介助の人に助けってもらった。階段の下や上は介助の人がいたからいけたけど、いなかったら無理だと思った。

人を乗せて段差を降りるとき、ちょっとこわかった。自分で曲がったりするとき、かたがとても痛かった。車いすであんなにつかれるとは思っていなかった。乗ったとき、こけへんか不安だった。いつもは何も考えずに手を洗っていたけど、車いすに乗りながら手を洗うときは背中を丸めて手を伸ばしてやりづらかった。今度、車いすの人がこまっていたら、手伝ってあげたい。

第三次 3時間 暮らしやすい町を考えよう 調べる 【学んだバリアフリーについて、身の回りの状況を調べる】 2h

バリアフリーについて話し合い

自分たちの身の回り（校内、学校の周辺、近所など）で、バリアフリーになっている所、なっていない所について意見を出し合う。

〔バリアフリーになっている所〕
レストランのトイレ、新しくできた駅、
市役所、バリアフリー対応信号機など

〔バリアフリーになっていない所〕
手洗い場、バス、歩道、古い駅
駅前の自転車置き場など

実際に車いすに乗ってみて、学校周辺でバリアフリーになっていない所を調べる。



考える 【いろいろな人が暮らしやすい町とはどんな町か考える】 1h

自分たちの町を暮らしやすい町（不便なことや困ることが少ない町）にするためにはどうしたらいいのか話し合う。

気づかせたいこと

段差、信号、駅、自動販売機など、実際に車いすに乗った視点で見ると、いろいろと不便なことがあることを体感する。

ただ感想を述べ合うのではなく、自分たちにできることはないだろうかを考える。

〔児童の意見〕

新しくできた駅はバリアフリーが進んでいるが、古い駅は車いすの人には使いにくい。

身近な大人に不便な場所を知らせることで、暮らしやすい町にしていく。

バリアフリーマップを作って市長に相談する。

普段からいろいろな人の立場にたつてものごとを考えていかないといけない。

< 児童の感想 >

「取組みを終えて」

ビデオを見たり、お話を聞いたり、車いすに乗ったりして、今まで体験したことがないことをやってみて知らないことがわかり、今までとは町の見方が変わった。

犬を散歩させるとき、話（犬の糞は車いすの通行に支障がある）を聞いたことを思い出した。

みんなが住みやすい町にするためには、まだまだバリアフリーじゃないところがたくさんあるので、みんなで改善していかないといけないと思った。

取組みを終えて

児童たちは障がいのある人との豊かな出会いによって、障がいのあることが「かわいそう」というネガティブな感想をもつのではなく、その人の特性を生かした能力を発揮する姿や心の持ち方、周りの人々の援助によっていきいきと生活している様子を聞いて、認識を新たにしようだ。

そして、車いすを実際に体験することにより、大変さ、気持ちを実感でき、障がいのある人の目線で身の回りのバリアフリーを考察できた。また、車いすに乗りながら、サポートしながらのフィールドワーク学習によって、車いすに乗っている人に対する関わり方を体で学ぶと同時に、新たな「課題」（誰もが暮らしやすい町をつくる）が見えたようだ。

今回の取組みにより、バリアフリーとは障がい者が社会生活に参加する上で生活の支障となる物理的な障がいを取り除くことだけをいうのではなく、一人ひとりの心にある障がいを取り除くこと（心のバリアフリー）も含んでいることが理解できたであろう。人の立場に立って物事を考える感性を養えたことで、障がい者への見方、関わり方が変わったようであり、このような取組みを継続することにより、車いすを利用している人だけではなく、身近にいる様々な支援を要する人たちの思いに気づき、その思いに応える行動ができる人に育てていきたい。

そのためにも今回の取組みだけで終わるのではなく、これからも人の立場に立って物事を考える感性を養っていくような取組みが必要であると考えている。

【 ポ イ ン ト 】

この取組みは「障がい者の生活などの理解」として、「視聴覚教材や当事者の講話などの事前学習」を行った後で、「車いす疑似体験」を行い、バリアフリーの重要性を学ばせる教育実践である。日頃、障がいがある人と出会ったり話したりする機会の少ない児童に対して、「パラリンピックを鑑賞する」「実際に地域生活をされている障がい者からの講話」といった十分な事前学習が行われている。従来から福祉教育の一方法として取り組まれている「車いす疑似体験」であるが、事前学習なしに、疑似体験のみを行うと「障がい者はかわいそう、大変」「私たちは障がいがなくよかった」といったネガティブな意識を子どもたちが感じてしまう可能性もある（本資料集 10 頁参照）。

そこで、障がい者ができないことを強調するのではなく、当事者の話を通して、児童が「何度こけてもあきらめず起き上がっていたのがすごかったです。」「僕たちにとっては歩道の端に犬の糞があるのは、車いすのタイヤがとおるあたりにあるのでとても困ってしまうことをはじめて知りました。」などの問題意識を持って、「疑似体験（体験学習）」を行うことで、障がい者個人の問題ではなく、社会の問題としてバリアフリーの重要性を考えるといった、より深い学びに導くことができる。

心（こころ）通（かよ）わせて ～ 支援学校との交流～

学年等

5年生 総合的な学習の時間など

ねらい

障がいのある児童とふれあいをもつことを通じて、ちがうことの素晴らしさや生命の尊厳を体感する。

障がい者の状況を知り、ともに生きるためには、どのように考え、どのように行動すべきかを考える。

【指導について】

障がいのある児童と出会い、ふれあいをもつ体験を通して、ちがいのあることの素晴らしさや生命の尊厳を体感し、自分も含め一人ひとりがかけがえのない存在であることに気づかせたい。

障がいのある児童とともに楽しく遊ぶための工夫を考える過程を大切にするとともに、実際に活動することで、いろいろなコミュニケーションの取り方があることを体得させたい。

支援学校の中にある様々な設備や機器にふれて、それらの役割を知り、誰もが生活しやすい社会について考えさせたい。

支援学校との交流を通して、社会には様々な人々が暮らしていること、その誰もが自分らしく幸せに生きていける権利を持っていることを理解し、どんな場面においても相手を思いやる心、助け合える心をもって生きていける人に育てたい。

取組みの流れ

< 全 10 時間 >

第一次	障がい者の状況を知る	3 時間
第二次	支援学校との交流に向けて	4 時間
第三次	支援学校との交流	2 時間
第四次	振り返り	1 時間

展開例

第一次 3 時間 **障がい者の状況を知る**

知る 【障がいについて知る】 2 h

「五体不満足」（乙武洋匡 講談社）（先天性四肢切断の著者が、自身の生活体験などをつづった本）

「光とともに...自閉症児を抱えて」（戸部けいこ 秋田書店）

（自閉症児「光」とその家族の葛藤や日常生活の大変さ、保育園や小学校の特別支援学級での生活、中学校の特別支援学級へ進学した「光」の成長と新たな問題などが描かれている本）

考える 【バリアフリーやユニバーサルデザインについて考える】 1 h

乙武さんのビデオ（テレビを録画）を見て、バリアフリーなどについて考える。

気づかせたいこと

普段、何気なく生活している中でも、障がいのある人にとっては生活しづらいことがたくさんあること。

ユニバーサルデザインの考え方が広まってきていること。

第二次 4 時間 支援学校との交流に向けて

知る、考える 【支援学校を知る】 2 h

支援学校からのビデオレターを見る。

支援学校の先生による事前授業、質問タイム

支援学校の小学部にも1年生から6年生までの友達があります。車いすに乗っていたり、足に装具をして生活している友達もいます。支援学校の時間割には、国語や算数などの小学校と同じ教科もありますが、自立活動()という時間もあります。

他に、いろいろな種類の車いすの紹介、車いすの押し方 など

自立活動の目標 = 個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。(特別支援学校小学部・中学部学習指導要領より)

考える、動く 【交流に向けて】 2 h

支援学校へのビデオレターを作成する。

交流会でのあいさつや内容について考える。

わたしたちもビデオレターを送ろうよ!

どのようにして、いっしょに楽しもうかなあ。

考えさせたいこと

どういうところに着目して、何を工夫すればいっしょに楽しめる交流ができるのだろうか?

学 習 活 動	指 導 の ポ イ ン ト
<p>交流会の内容について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすいあいさつを考える。 ・いっしょに楽しめる遊びを考える。 ・遊び方や楽しみ方の説明を考える。 ・どのようにコミュニケーションをとっていけばいいかを考える。 <p>みんなのよく知っている歌を歌ったらどうかなあ。</p> <p>よくわかるように、ゆっくりと話せばいいかなあ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・バリアフリーやユニバーサルデザインについて学んだことを思い出す。 ・乙ちゃんルールやビデオレター、支援学校の先生の話を出し、わかりやすいあいさつやいっしょに楽しめる遊び、その方法について考える。 ・言葉を交わさなくてもできるコミュニケーションの方法について考える。 <p>スロープを使ってペットボトルボーリングをしようよ!</p> <p>手をつなぐだけでも通じ合えるかもしれないなあ。</p>

第三次 2 時間 支援学校との交流

深める 【支援学校の児童との交流】 2 h

自分たちの考えた遊びを通して交流する。

【目標】障がいのある児童とふれあう中で、心を通わせ生命の尊厳やちがうことの素晴らしさを体感する。

学 習 活 動	指 導 の ポ イ ン ト	備考(準備物)
1 交流全体会 ・支援学校の児童のあいさつを聞く。 ・支援学校の児童へのあいさつと歌を披露する。 2 各クラス(グループ)に分かれて交流する。 <主な交流内容> ・風船バレーボール ・ハンモックでゆらゆら ・サイコロコロコロ(すごろく) ・手話で歌う 「ともだち」 ・おしくらまんじゅう ・スロープでのペットボトルボーリング ・フルーツバスケット ・ころがし卓球 3 全体で集まり、終わりのあいさつ ・ふれあった児童たちと別れとお礼のあいさつ	・話している人をしっかり見て、心を傾けて聞く。 ・わかりやすく表現する。 ・相手の障がいの特性に配慮して行動する。 ・支援学校のそれぞれのクラスの先生の説明、注意をよく聞く。 ・わからないことや疑問に思ったことは素直に質問する。 ・お互いに、次の出会いへの期待感をもてるようにする。	名前カード 歌詞カード

ころがし卓球の様子



第四次

1 時間

振り返り

振り返りを交流する 1h

これまでの学習について話し合い、感想を書く。

< 児童の感想 >

「交流会」を終えて

手話をしながら歌を歌いました。「ともだち」という歌でした。手話をするのがちょっとむずかしかったです。行く前とかは不安やったけど、遊んでみて楽しかったです。

くすぐり遊びとかハンモックとかをやりました。Aさんの手の動きや表情の変化で、わらってるとか、ねむたそうとか、先生はちゃんとわかっていました。教室に入ると、みんな横になりながらお茶を飲んでいました。体温調節や水分調節がとても大切だとわかりました。

Bちゃんといっしょした後、わたしが手を差し出すと、笑顔になりギュッと手をにぎり返してくれました。私はその時、とてもうれしかったです。その後、ふうせんバレーをしました。
みんな一生けんめいやってくれたので、うれしかったです。

取組みを終えて

校内に重度の障がいのある児童が在籍していないので、この交流を実施するまでは、障がいのある人にもどのようにコミュニケーションをとればよいかわからず、不安を感じている児童が多かった。

しかし、支援学校の児童や先生方に明るく温かく迎えていただき、緊張していた気持ちも少しずつほぐれたようだ。どうすればよいかわからないことを素直に支援学校の先生に聞きながら実際にふれあう中で、言葉だけでなく様々な方法でコミュニケーションがとれることがわかって、支援学校の児童たちとのゲームなどの交流を本当に楽しんでた。これまでの知識だけの学習ではわからなかった、たくさんのことを心と体で学んだ交流会であった。

この取組み全体を通して、自分の身の回りだけの狭い範囲でしか物事を見ていなかった児童たちの視野が広がったことであろう。さらに、この交流会をきっかけとして、支援学校の「もちつき大会」に参加したり、本校の「チャイルドカーニバル」(児童会主催の行事)に支援学校の児童を招待したりして交流を継続している。また、児童たちは「チャイルドカーニバル」の計画を立てる際、バリアフリーの考え方を取り入れて、障がいのある人も楽しめるよう計画を立てていた。

このように、この取組みにより体感し、気づき、学んだことは、障がいのある人に対する思いやりから行動に確実につながっている。今後は、日々の生活における身近な友達や家族への思いやりや助け合いにも生かすことができるよう、さらに支援していこうと考えている。

支援学校の「もちつき大会」での交流の様子



【ポイント】

支援学校との交流を通して、障がい児(者)の生活理解を深めることを目的とした取組みである。単に「交流すること」を目的とするのではなく、支援学校からのビデオレターや教材学習を行うなど丁寧な事前学習を行い、事前学習を基に自分たちに何が出来るかを主体的に考え、アイデアを出し合って、交流を行っている。知識のみの福祉教育や障がい理解教育ではなく、実際に出会い、交流を通して感じたことがともに生きる社会を創造することの必要性を考える機会となる。この交流で築いた、支援学校と地域の学校の児童の互いの顔がわかりあうようなつながりは、児童たちの将来の生活にとって貴重な財産になるであろう。

みんなであくしゅ

～学校全体をあげての構造化の取組み～

学年等

学校全体 ～共生社会をめざして～

ねらい

児童が安心していきいきと学ぶ中で、生きる力を身につけ、自分らしく自己表現を
 図っていくことのできる教育活動の推進をめざす。

どの児童もいきいきと生活ができるように、組織的に学校をあげて構造化に取り組む。
 障がいのあるなしや、教科の得意・不得意などにかかわらず、どの児童にもわかりや
 しく学習できるように、授業内容を工夫する。

学びあい、支えあい、高めあう児童と先生のいる学校をめざす。

【構造化について】

構造化とは、見通しをもたせ、集中しやすくするための環境や指導の工夫である。例えば、LDなどの
 支援の必要な児童が、自律的に自発的に行動したり考えたりできるようになることを目的として行う。理
 解が進み、適切な行動が可能になり、成功体験ができるように、場所や場面、スケジュールや時間、活動
 の内容や順序などを構造化する。このような構造化の取組みは、全ての児童にとっても安心して生活を送
 る上で有効である。

取組み例

【教室環境の場所や時間などの構造化】

前面黒板の壁面



黒板に集中できるように、黒板の上
 部には掲示物をはらずにすっきり
 させている。

1日のスケジュール



教員を頼らずに、児童自ら一日のス
 ケジュールを把握できるようにし
 ている。

当番表



名前カードに顔写真をはり、誰がど
 の当番なのかすぐにわかるようにし
 ている。

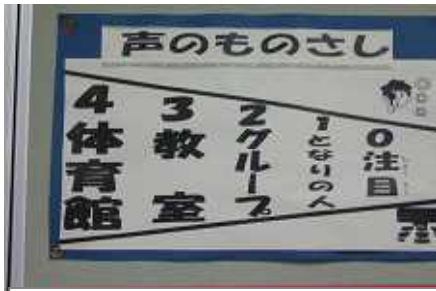
立体の呼び方

問題を図解し、解き方の
 流れをわかりやすく説明
 している。



【授業中のルール】

声のものさし（中高学年用）



出す声の大きさを「ただ大きい声で話さない」と指示するのではなく、図解することで誰にでも理解しやすいようにしている。

挙手するときの決まり



全員が授業に参加できるように、挙手するときの決まりごとをつくり、図解している。

話し合い時のルール



話し合いのルールを決め、取り組み内容により「ひそひそモード」や「おだまりモード」のカードを黒板に貼り、はじめをつけやすいようにしている。

声の大きさ表（低学年用）



出す声の大きさを「ただ大きい声で話さない」と指示するのではなく、動物の大きさに理解しやすいようにしている。

机の中



何があって、何がないのか。また、使った物をどこにしまうのかを図解し、整理しやすいようにしている。

【そうじの構造化】

そうじの手順



誰がやっても同じようにきれいに掃除できるよう、一枚に図解し、わかりやすくしている。

トイレそうじの手順



トイレのように、そうじ手順が複雑である場所には、できるだけわかりやすいように画像で表示している。

ごみはここへ！



ゴミ箱の位置がすぐわかるように、また、設置場所を固定するために、図示している。

スリッパの並べ方



使うときにはきやすいように、脱ぐときに整えやすいように、仕切りをつけている。

道具の置き場所



そうじ道具入れがない場所では、使いやすい状態で、かつ教室活動の妨げにならないように一箇所に道具を集めている。

ぞうきんをきれいにならべよう！



洗ったぞうきんを、きちんと干すというのは、児童にとって少し面倒なことである。そこで、できるだけかわいくて楽しそうなイラストを使い楽しく作業ができるように工夫している。

【支援学級の構造化】

座席の配置



みんなと一緒に勉強するのが苦手な児童には、自分でできることを増やせる場所として、教室を仕切って居場所を決める。

整理カゴ



机の横のカゴは、課題を入れておくもの。課題を一つずつカゴにわけて、混乱をさけている。

ブースの工夫



児童一人ひとりの特性に応じて、ブースの掲示物をかえている。

1日のスケジュール



児童も教員も、すぐに一日の流れが把握できるように図示している。

【学習への視覚支援】

スピーチの仕方

スピーチの組み立て方がわかるように、カードにしている。



いまここ



黒板上で「今、どこを学習しているのか」を示すカード

ここを書く



黒板上で「どこを書くのか」を示すカード

「こえメーター」「はやさメーター」「カメーター」はそれぞれの大きさをメーターにして視覚的に示す。

こえメーター



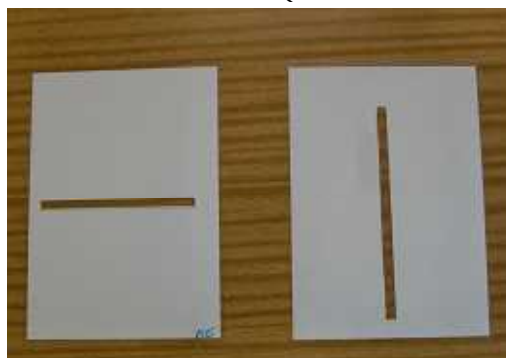
(はなす) はやさメーター



カメーター



読みのスリット板(本読み用の補助グッズ)



一行ずつ本を読むときに使う補助グッズ
(左:よこがき用、右:たてがき用)

本にシートをかぶせて、
一行ずつ見えるようにスライドさせる。

取組みを進めて

[障がいを理解するための教育を、次の3点を軸にして推進]

啓発	<教職員へ> ・肢体に障がいのある児童の保護者の話を聞く ・市教育委員会指導主事の講話 ・肢体に障がいがあり、パラリンピックに挑戦している先生による講演 ・支援教育学習会（発達障がい、WISC - の検査法、模擬事例検討会） <児童へ> ・車いすダンスの人たちとのワークショップ ・各学年と支援学級との交流会 ・支援学級担当教員による通常の学級に出向いてのワークショップ
支援教育の推進	・学校便り ・支援教育校内委員会（事例検討会、支援教育学習会） ・支援教育校内研修会（年2回：配慮児童の報告会）（年2回：校内全体研修会、学識の講演など） ・構造化（学習環境の整備、掃除など） ・大阪府発達障がい者支援センター（アクト大阪）の巡回相談
交流教育の推進	・支援学級と他校の支援学級や地域との交流 ・支援学級と通常の学級との交流（授業時間、休み時間、給食時間、当番・委員会活動、学年交流会）

これら様々な取組みを進めていくことを通じて、学習環境面での構造化が自然に進んできた。特に教室の環境整備についての、前面黒板の壁面はすっきりと、1日のスケジュール、授業中のルール、机の中、当番表、名札のチェックなどの学級担任の工夫を始めとして、教室やトイレ掃除の仕方などでも工夫するようになってきた。これは、発達障がいなどの支援の必要な児童だけでなく、どのような状況の児童にもわかりやすいユニバーサルデザインをめざしている。もちろん、支援学級でも構造化を進め、自立課題が取り組めるように工夫しており、介助の必要な児童も少しずつ自分でできることが増えてきた。1日のスケジュールは、その児童に適するよう活動の内容や順序を立てている。また、スピーチにも力を入れており、スピーチの仕方を視覚により支援している。

これらの取組みのおかげで、支援学級の児童は様々な人と関わる中で本当に楽しくいきいきと自信をもって学校生活が送れていると実感している。支援教育は、磐石な学級経営のもとで成立すると日頃感じている。一人では支援教育は進められない。学校全体の体制の中で全教職員の共通理解の下、障がい者を取り巻く課題と障がいについての理解を深める教育がますます浸透し、児童みんなが安心していきいきと生活でき、学びあい、支えあい、高めあう子どもと先生のいる学校をめざしていきたい。

【ポイント】

全ての児童が安心して生き生きと学ぶためには、支援学級在籍の児童のみならず、様々な教育的ニーズをもつ児童たち一人ひとりに対して個々のニーズにあった教育を提供することが必要である。

この取組みは、聴覚からの情報が理解しにくいとされている広汎性発達障がいの児童などに対して「構造化」をキーコンセプトに校内や教室内の「共学・共生社会」をめざした取組みであり、特別支援教育と人権教育を統合する形での福祉教育の実践であるといえる。

<学校におけるユニバーサルデザイン化のポイント> （愛媛大学 花熊 暁 教授）

* 教室・学習環境づくり ・ 教室環境の整備 ・ 学習環境の整備

* 授業づくり ・ 見通しがもてるように ・ 指示、説明をわかりやすく

・ 視覚的にわかる手がかりを用意 ・ 個人差に考慮し、基礎と発展を明確に

* 学級集団づくり ・ 落ち着いてすごせる学級の雰囲気 ・ 間違いや失敗を否定的にみない学級

・ 学び方の違いを認め合える学級